

会員のば

ゴルフの履歴

函館市医師会
福德整形外科・外科

福德 修治

去る6月30日、北海道医師会主催の北海道ドクターズゴルフ大会が小樽市医師会の担当の下、盛大に開催され、私も8年ぶりの名門小樽カントリー倶楽部で楽しく苦しいゴルフを満喫することができた。北海道の芝刈り族（ゴルフ愛好家）にとって、長い冬を越し、半袖で楽しむことのできるこの時期は、週末の天気を気にしながらの毎日である。

私が初めてラウンドしたのは学生時代、夏休みで帰省した折、当時ゴルフに熱をあげていた父に連れていかれたときである。この頃は、ゴルフは簡単な大人のお遊びくらいにしか考えておらず、その後数年間は接することもなかった。卒業後、北大整形外科に入局し、ゴルフブームの中、同僚たちと一丁前の社会人気取りで再び始めた。道内の研修先の病院でも当時はゴルフが盛んで、一夜漬けの練習でコンペに参加させてもらっていた。昭和61年には、当時の新日鐵室蘭総合病院で外科部長であった足永武先生が室蘭ゴルフ倶楽部のクラブチャンピオンになられ、祝賀会に参加させていただき感激した思い出がある。

市立釧路総合病院では故 多胡秀信先生の下でゴルフ部の初心者組に入れられ、緑ヶ丘のミニコースで初心者コンペに参加、上級組を目指したがかなわなかった。名寄市立総合病院では朝6時から近くの

名寄白樺カントリー倶楽部で練習をしてからの出勤、夜は医師寮横にあった倉庫内での自主練習が部員のdutyであった。4年間勤務した帯広厚生病院でも月1回のコンペがあり、多くの参加者の中で現帯広市医師会長の稲葉秀一先生とは良きライバルで毎回ブービー賞を争っていた。

平成10年、42歳で故郷の函館で父の医院を継いだのを機会にゴルフと真剣に向き合うことにした。初めてレッスンプロの手ほどきをうけ、自己流のフォームは全否定、改造された。函館ドクターズゴルフクラブにも入会、今では仲間たちと、毎週末のラウンドで楽しいゴルフライフを送っている。歴史ある函館ドクターズゴルフクラブでは月1回のコンペのほかに、昭和45年からは青森ドクターズと年2回の交流戦を行っており、来年は50年、100回記念大会にあたる。青函トンネル開通前までは青函連絡船で片道5時間をかけた遠征であったことを考えると先輩たちの情熱、意欲が感じられ、今均会長の下、この伝統を引き継ぎ、青森ドクターズとの親睦を深めていきたいと考えている。

ゴルフは自分の技術、メンタルをコントロールし、そして運も味方してくれなければ良いスコアは出せない。やり慣れたゴルフ場でも決して毎回良いスコアが出るわけではなく、ラウンド後に反省することが多い。ボールが同伴者より1mでも先に飛ばば優越感にひたり、自分の読んだライン通りのロングパットが決まればまるでプロになったようで無意識にガッツポーズが出てしまう。本当に不思議な深いスポーツである。ある雑誌広告の中で『①ゴルフ前夜はうれしくて眠れない。②傘を持つとついスウィングをしてしまう。③ゴルフ好きな人とはすぐに親しくなる。④ナイスといえばボディではなくショットだ。全部YESはゴルフ命』とあった。われわれ芝刈り族は当然『全部YES』です。あちこち故障の絶えない身体になったが、多くのゴルフ仲間たちと80歳過ぎまで健康でこんなゴルフができれば良いなあと思っている。

私の人生の師であり、ゴルフの楽しさを教えてくれた故 須々田幸一先生に感謝いたします。



ゴルファー憧れのペブルビーチ・ゴルフリンクス (No7 Par3 97y)
強風の中、バーディを取った思い出のホール